

## 感情

西田 幾多郎

感情は感覺と同じく精神的要素と考へられる。ヴァントは客觀的經驗内容の要素が感覺であつてその主觀的要素が單一感情 *einfache Gefühle* であると云つて居る。試にヴァントに依つて感覺と感情との異同を比較すれば感情も感情と同じく二つの屬性を有つて居る。感情の性質と云へば *ernst, heiter, traurig, düster, wehmütig* などよく如きものであつて、その強度とは感覺の場合と同じく *schwach, stark, mässig stark, sehr stark* といふ如きものである。此點に於ては感覺も感情も同様であるが感覺の強度は同一性質に於て零から最大強度に變ずるに反し、感情は *Indifferenzpunkt* から相反せる兩方面に變ずる。例へば高き音と低き音とは感覺としては單に區別であるが感情に於ては反對である。次に單一感情は單一感覺に伴ふのみならず、構成せられた表象

777 にも伴ふ例へば Harmoniegefühl の如きも單一感情である。終りに感覺の性質は互に *disparat* であるが單一感情はすべてが一つの *zusammenhängende Mannigfaltigkeit* を成すといふのである。

感情の性質に關しては、ヴェントは從來の心理學者が單に快樂と苦痛の二種となすと反し、*Lust und Unlust, Erregung und Beruhigung, Spannung und Lösung* の三方向を區別して居る。併しヴェントの三次元説 *The tridimensional theory of feeling* に就ては有力なる反對者が多い。例へばテイチェナーは論理的に心理的に又實驗的に此説の誤謬を指摘して居るが心理的に見ればヴェントの所謂 *extremum and depression, tension and relaxation* は決して單一なる要素ではない、其中は常に有機感覺特に *kinesthetic sensation* を含んで居る。此等の精神現象はその感覺的方面に於て種々の *muscular attitudes* を含み、之に快か不快かの感情の伴ふものに過ぎぬといふのである (Titchener, *A text book of psychology*, Part I, §72.) ヴェントは又之に反し自説を固守して、情緒の要素たるべき氏の所謂三方向の如きものが既に感情の要素の中にあるべき筈である、多くの心理學者が快不快の二種に限るのはそれぞれ内容を異にする感情の *Kollektivbegriffe* を具體的狀態と考へるに過ぎない、感情を筋覺などと同一視すれば美學や倫理學に對して心

理學は何等の説明を與へることはできぬと云つて居る(Grundriss 10 Aufl. s. 102)。

以上述べた如く感情は感覺と同じく性質と強度とを有する一種の精神的要素であるが種々の點に於て感覺と其類を異にすると考へられる。實驗心理學者は此等の現象を論ずるに自然科學者が自然現象に對すると同一の態度を以てするのであるが、余は精神現象の性質として深い内省的見方を要するではないかと思ふ。感情は感覺に對して主觀的と考へられる、ゼントも云ふ如く感覺は客觀的經驗内容の要素であつて感情は主觀的要素である、感情と感覺とを區別すべき本質的特徴はこの「主觀的」といふ一語にあるのである。ゼントが感覺と感情とを區別する種々の特徴の如きも此根本的性質に依つて明にすることができらるであらう。物の本質を理解するには單にその種々なる方面に於ける特徴を比較するのみではなくして深くその内面的性質に入らねばならぬ、特に精神現象に於ては爾考へられるのである。實體概念 Substanzbegriff<sup>1)</sup>によつて成る自然現象に於ては種々の方面より見た性質の枚擧にて可なる場合もあるであらうが、現實概念 Aktualitätsbegriff<sup>2)</sup>による精神現象に於ては單に種々なる性質を列擧せずして、深くその内面的性質を明にせねばならぬ。内面的といふことが精神現象の本質を成して居るのである。ゼントは喜 Freudeの

779  
 情緒を心理的に説明してその Grundcharakter では快樂であるが、その経過に於て感情の高まると共に exzithierend となり、過度の強さに於ては depimierend となると云つて居る(Grundriss 10 te Aufl. s. 214)。

意味を實在化すると思はれる古き心理學をすて、嚴密なる實驗心理學の立場から情緒を解釋すれば、右の如きものなるかも知らぬが、我々の喜とか悲とかいふものは此の如き外面的記載によつてその本質を盡し得るものであらうか。喜とか悲とかいふ情緒の本質は全體としての特徴の上にあるのである。すべて精神現象は生きた一つの内面的作用としてその實在性を有するのである。精神現象の本質を明にするには此の如き實在性を明にせねばならぬ。而して之を明にするにはその動的性質を考へねばならぬ。動的性質を考へるには之を其全體との關係に於て見なければならぬ、即ち内面に於けるその生成的條件を考へて見なければならぬ。而して意味即實在なる精神現象に於て意味の働きを離れて之を考へることはできないであらう。余はかゝる考からして寧ろスピノーザが「情緒の定義」に於て Joy (gaudium) is pleasure accompanied by the idea of a past thing which surpassed our hope in its event. 或は Love(amor) is pleasure accompanied by the idea of an external cause. とか云つて居るのが却つて情緒其物

の内面的本質を明にして居るではないかと思ふ。單に識別的關係を以て意識の根本的形式となす實驗心理學の立場からしては、右の如き説明はスコラ哲學の遺風に過ぎないと考へられるかも知らぬが、精神的實在の本質たる綜合的全體を説明するには所謂實驗心理學の見方の上に尙一步を進めねばならぬ即ちその全體を成立せしめるものゝ根柢に入らねばならぬ。面して此の如き説明に進むには生理的説明を通じて物學に入るか、然らざれば例へばデイルタイの所謂 *beschreibende Psychologie* の如きものを通じて歴史や哲學と結合せねばならぬ。精神現象としては後者がその本質を明にするものであると思ふ。

---

感情と感覺との位置關係に就ては心理學者間に種々の説があるであらうが、多くは感情は感覺に對立し、之と同列的なる精神的要素と考へられて居る。色・音・香味などの外界刺激は我々に對して一種の感覺を生ずるのみならず、我々は之に對して種々の感情を有つと考へられる。感情とは我々の状態の意識である、感情はその主觀的なるを以て、客觀的なる感覺と區別せられる。ザントの云ふ如く感覺は客觀的經

驗内容の要素であつて、感情は主觀的要素であると考へられるのである。我々の主觀を對象界に投射して一種の自然物の如く考へるならば、主觀は客觀と同列的となり、感情は感覺と同列的なる精神要素と考へることができらるであらうが、此の如き主觀は對象化せられた主觀であつて眞の主觀ではない、眞の主觀は對象化することのできない却つて對象を維持する主體 *subiectum* でなければならぬ。意識的自我の主觀的といふのは此意味に於てでなければならぬとするならば、感情と感覺とは單なる同列的なる精神的要素と見做すことはできない。感情が主觀的要素として感覺と區別せらるゝならば主觀的といふ語の意義を明にせねばならぬ。

我々の自我を反省し之を知識對象界に映して他の自然現象と同列的と見るならば、感覺が物の性質と考へられる如く感情は主觀の性質と考へられるかも知らぬ。併し一方から見れば種々なる感覺が我の感覺として主觀的と考へられるのみならず、所謂實在界も先驗的自我の統一によつて成立する對象界と考へることもできる。此の如き主觀は之を反省することはできない、何となれば此主觀が反省するのである。此の如き統一は被統一者と同列的に見ることはできぬ、同一列のものが他を統一することはできないのである。精神現象の自然現象と異なる所以は此の如き統

一の實在性になるのである。我々の自我とは此の如き統一の中心點である。自我は種々なる作用の結合點である。感情が主觀的といふのは此の如き統一の意識としてでなければならぬ。嘗て云た如く感覺は表象自體が識別的關係に於て立つものとするならば感情は此の如き關係を成立せしめるものゝ意識である。此意味に於て感情は感覺と其類を異にした意識である、感情は感覺に比して一層高次のなる意識である。感情に注意を向ければ感情は消滅するも之が爲である、強いて之を同列的に見れば有機感覺の如きものとなるのである。感情が感覺と同列的なる精神的要素と考へられるのは實驗心理學者が精神現象の本質たる内面的性質に注意を拂はないからである。余は此點に於てプレントナー一派が對象的關係 *Gegenstandsliche Beziehung* に依つて精神現象を分類する考に同意したいと思ふ。此見方よりしてプレントナーの云ふ如く、感情は對象間に於てではなく對象に對する關係其物の中に反對を含むといふ點に於て寧ろ判斷に類すると云つてよい。感覺は識別力を有つた表象自體として單なる作用と考へられるが、感情は作用の作用である、作用の結合である。而して意識現象に於ては統一が進めば進む程、即ち主觀的なればなる程實在的となるのである。

意識の背後には必ず含蓄的なる或物がある、意識はいつでも *off + in, off* である、含蓄的なる全體が顯現的となる、即ち一般者が己自身を分化發展するのが意識の發展である。此の如き場合に於て一般者 *das Allgemeine* はいつでもその特殊なるもの *das Besondere* に對して高次の立場に立つ、例へばジヤムスの *psychic fringe* の如きものに於ても、文章の一語が意識に上つた時、文章全體の意味を表す *fringe* は單なる部分的意識と同列的ではない。同列的なるものは全體を代表することはできぬ。若し此の如き區別は意味の區別として之を排するならば、氏の所謂 *fringe* の如きも一種の有機感覺の如きものに還元せられねばなるまい。ジヤムスが根本的經驗論の立場から *to* とか *from* とかいふのも一種の經驗であるといふが、經驗といふ語は盡く同一意義と考へることはできない。具體的意識にはいつでも己自身の中に非顯現的な部分がある、對象化することのできない部分がある。意識は之あるに依つて自發自展的である、獨立である。自然現象に於ては現象と本體とは互は外面的であるが、意識現象に於ては現象其物の中に本體がある、力がある、有限の中に無限があるのである。これは矛盾である、併し自己の中に矛盾を含むことが意識の實在である。單一なる意識は意識として成立することはできぬ、赤の意識は、非赤に對立することに依



つて成立し、此對立を成立せしめる統一者はその孰でもないと共に又此對立を離れたものでもない。此の如き統一者が主觀的作用である、此作用に對して其中に含まれるもの即ち被統一者は *intentionale Gegenstände* となる即ち所謂内容 *Inhalte* となる。無論右の如き主觀的作用を更に反省して一層大なる作用の内容となすことができるかも知らぬが、同じく統一といつても純なるアプリアリの統一とアプリアリのアプリアリ即ち統一の統一とを區別することができる。此の如き統一の統一が自己である、此の如き統一の經驗が意識現象である、而して此の如き方向に向て亦統一の上に統一を考へるとができるのである。向に感覺は表象自體が識別的關係に於て立つもの、即ち表象自體の識別力を有つたものと云つたが、己自身の中に識別力を有つ表象自體とは單なる表象自體ではなくして動的アプリアリでなければならぬ、即ち作用自身でなければならぬ。識別的關係とはアプリアリとアプリアリとの關係、即ち作用と作用との關係である。意識現象とは此の如き統一の統一の體系である。意識は一般者の統一によつて成立するといふことは、換言すれば意識は一般者が己自身を限定すること即ち對象化することであつて、意識は一般者の自己實現であると云ふことを意味する。此の如き對象化の方面即ち限定の方面が知識である。

純なる一つのアプリオリの上に立つものが意味の世界と考へられ、アプリオリの連結の上に立つものが實在界と考へられる。併し意識が大なる統一に進むにはそれ自身の中に深く入らねばならぬ、意識は肯定と共に否定の方面を有つ、外展と共に内展の方面を有つて居るのである。例へば、赤の表象に對して、非赤の意識は既に同列的の意識ではない、一つの判斷に對して假定 *Annehmen* の立場は更は大なる立場である。此の如き内展的方面の對象が所謂意識現象である。而して此の如き方面を追ふて如何なる意味に於ても對象化することのできない剩餘が感情であると考へることができる。何等かの意味に於て對象化することのできるもの、即ち限定し得るものは知識となる、たとひ明に限定し得ぬとしても何等かの意味に於て限定の可能性を有つものは尙無意識として知識の部分に屬するのである。唯すべてを限定し盡くして如何なる意味に於ても限定のできない剩餘が感情と考へられる、即ち感情はすべてのアプリオリのアプリオリとして、すべての作用の統一として我の状態の態度である。我とは作用の統一點である。およそ或一つの立場に對して包容的にして大なる立場といふのは前の立場に對して無限定にして自由なる立場である。感覺に對して表象は無限定にして自由なる立場である、即ち現在に感覺せないもの

を表象することができ。記憶とか想像とかいふのは表象作用に比して更に自由なる立場であり、思惟に比してはマイノングの假定といふ如き立場は更に無限定なる自由の立場である。すべて高次的なる立場は次位的なる立場の否定を含む、我々は或一つの立場の否定を意識する時、既に高次的立場の上に立つて居る。高次的立場は次位的立場を *aufheben* したものである。具體的なる意識現象に於ては高次的立場がいつでもその背後に含まれて居る。心理學者が意識はコントラストに依つて成立するといふのは之に依るのである。感覺の背後には表象が含まれて居り、表象の背後には記憶が含まれて居る、少くとも含蓄的には無限に高次的なる立場が含まれて居る。現在の意識は作用の結合點である。物力は無限の外界に連なる如くに精神作用は無限の内面に連つて居る。我々の情意とは右の如き考へ方によつて總ての知的作用を超越して無限に自由なる高次的立場である、知識の錘を以てして達することのできない深底 *Bytius* である。或は知的對象となり得ないもの、何等の意味に於ても限定し得ざるものは無内容と考へられるかも知らぬが、我々が知識の限定を意識する時、既に知識以上の立場に立つて居る。精神現象に於ては此の如き高次的立場即ち統一が實在的であるのである。美的感情に就てのカントの所論に

從へば、限定的判斷作用とは特殊を一般の中に包攝する作用であつて反省的判斷作用とは特殊なるものが先づ與へられ、之に對して一般なるものを見出す作用である。而して或物の概念は其物の存在の根據としてその目的と考へることができず、すべての目的の到達には快感を伴ふのであるが、美感とは純なる反省的判斷作用即ち自然の形式的合目的性に伴ふ感情であると云ふのである。一般から特殊に行くといふのは余が所謂外展の方面であり、特殊から一般に行くのは余が所謂内展の方面である。反省的 *reflectend* に物を見るとは物をその具體的根柢に返つて見ることである。内展的對象として見ることである。一つのアプリオリの上に立つ對象をその元に返つて見るといふことは之を作用として見ることである。自然の合目的見方といふのは此種の見方である、即ち精神現象の範疇によつて自然を見るのである。斯くして感情とは反省的判斷作用に伴ふ意識である、感情は作用の統一の意識である、限定的認識作用の具體的根元と云ふことができる。一般者から始まつて一般者に還ると考へられる意識は感情より始まつて感情に終ると考へられるのである。知識の内容と形式とを峻別し内容を以て、一概に受動的と考へたカントは形式的判斷作用に伴ふ感情にのみアプリオリを認めたが、我々の直接經驗は元來受動的ではない、我

我の純なる知覺は今日の藝術論者の云ふ如くそれ自身に於て動的である、眼の知覺にも耳の知覺にも純なる部分がある。單に形式的判斷作用のみならず、すべての知的作用は純なる作用として美的感情を伴ふのである。藝術家の眼には線は直線と曲線との *Durchdringung* であり色は種々なる *Tendenz* の結合であると云ふが、物をその純なる状態に於て見る藝術家の眼には、色も線も盡く作用の連続として見えるのである。これ即ち美的意識であつて、此處に純なる美的感情が成立するのである。美的感情は認識以上の神秘境から物の生ずる感情である、因果律を超越した發生の意識である。

### 三

余は感情に就て大體の考を述べた。感情は感覺と次元を異にした精神現象である。此處に感情の本質がある。すべて精神現象は意味即實在であつて、現實概念に依る實在である。感覺といへども勿論此本質を備へて居る。感覺と單なる表象自體との異なる所は此點にあるのである。併し感覺の據つて立つ所の識別的關係といふのは意識的統一の内容を極小にしたもので精神現象成立の初級である。更に

表象となり思惟なれば、統一の内容が積極的となり能働的となる、即ち精神現象がその本質を現することとなるのである。感情は此の如き考を進めて種々知力の統一と考へることができ、即ちアブリオリのアブリオリと考へることができ。Rin-band が A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu と云ひ Baudelaire が Les parfums, les couleurs et les sons se répondent と歌ふ時、その融合は感情の基礎に於てでなければならぬ。感情は受働的であると云はれるが、ゲーテが自己の生涯を詩化することに依つてその苦惱を脱したといふ様に、我々は情に依つて知を包容し之を超越して自在なることができる。

感情を右に述べた如きものとして、感情の内容とは如何なるものであるか。感情は知識と違ひその内容が不分明であるといふのは一般の考ではあるが、敏感なる藝術家の感情が科學者の知識に比して必ずしも不分明とは考へられない。感情の不分明といふのは概念的知識に表すことができなまいといふに過ぎぬ。感情其物の意識が不分明ではない、感情の意識は知識のそれに比して却つて繊細微妙であると云ふこともできる。此の如き感情の意識内容とは何であらうか。すべて精神現象の特徴は對象の内在といふことであつて、知覺には知覺の對象があり、思惟には思惟の

對象があり、之に依つて種々の知覺や思惟が區別せられるとすれば、感情の對象とは如何なるものであらうか。或は純主觀的なる感情は何等の客觀的對象をも有たない、それが感情の本質であるとも云ひ得るであらう。併し微細に識別せられる感情には據つて以て區別せらるべき何等かの内容があると考へざるを得ない。縦、その對象は知識のそれと其類を異にするものとしても、感情にも一種の内在的對象があると考へざるを得ないであらう。勿論、多くの心理學者の考へる如く感情を單に合成物として、その微細なる色合はすべて知識的要素の差違に屬するものとすれば、感情其物の性質としては快不快といふ如き抽象的概念によつて表はさるべき二種の區別しかないと云ひ得るでもあらう。併し意識現象は單なる合成物ではなくして一つの統一でなければならぬ、意識現象の實在性は其要素にあるのではなくしてその統一にあるのである。特に感情に於てはザントも云つて居る如く構成せられた表象に伴ふものも單一感情である、例へば *Harmoniegefühl* の如きも感情の結合ではなくして一つの感情である。感情が此の如きものであるとするならば、感情には無限に性質上の差異がなければならぬ。

我々が物を知るといふことは之を限定することである、如何なるものなるかを限

定することに依つて物を知ることができ、判断は此の如き限定の形式である。併し限定にも種々の意味があり、必ずしも同一の意義に於てのみ限定といふことはできぬ。或一つの立場に於ては限定することのできないものも更に一層高次的なる立場から之を限定することができる。例へば、有限數であつてもその數多き時は直覺的に限定することができないにしても、我々は之を知ることができぬとは云はれない。無限數とは我々が達することのできない即ち消極的に考へるの外ない數であるが、我々は分離的要素の立場を超越して分割作用其の物を認識することに依つて即ち認識對象を客觀から主觀に移すことに依つて無限數を有限數と同一の法則によつて取扱ふことができる。カントルの集合論は斯くして起つたものである。マイノングの云ふ如く、赤の表象に對して「非赤」の意識は、赤の表象と同列的ではない、一層高次的なる意識である。單なる表象の立場からは無限定にして無内容なる意識と考へられるかも知らぬが、高次的立場に於ては明に限定せられた意識である。思惟に對してマイノングの假定の立場は無限定であるかも知らぬが、無内容とか不明瞭とかいふことはできない。「圓い三角」といふ如きことも無内容の意識ではない、明に内容を有つて居るのである、背理と思はれるのは内容であるが故である。すべ



て或物を限定するといふことは之に對する反限定の立場を含んで居る。而して此反限定の立場は前の立場に對して同列的ではなく、その具體的根元たる高次の立場への關係を含んで居る。否定的判斷が肯定的判斷よりは一層高次的と考へられるのも之に依るのである。Etwasはだゞと同列的ではない、高次の立場への階段である。高次の立場からは前に反限定として消極的に考へられたものが積極的内容を得ることとなるのである。向にも云つた如く感情とはすべての意識内容を知的に對象化した剩餘である。知識的には無内容であり無限定であると考へられるかも知れぬが、高次的なる感情の立場に於ては限定せられた明なる内容を有たねばならぬ。意識現象に於ては一々の内容が作用であつて、此等の作用を統一する最高のアプリオリは人格的統一である、感情の内容は人格的統一の上の内容である。人格といふのは單なる抽象的概念ではなくして、種々なる作用の動的統一である、種々なるアプリオリの力學的關係である。感情とは此の如き動的統一の上に現はれたる意識内容である。心理學者が感情を研究するのに Ausdrucksmethodeを用ひ、表現によつて感情の性質を分つのも之に依ると考へることが出来る。恐らくは廣義に於ける表出運動なくして明晰なる感情はないとも云ひ得るであらう、感情の内容を明にするものは

表出運動である、特に術的動作は我々の感情に明晰なる内容を與へるものである。手のないラフ・エルは恐らくは不明瞭な感情外に有つことできまい、表出なき感情は混沌たる快不快の感情の如きものであらう、藝術家は彼自身の感情を明にする爲に製作するのである。ドイツ人は、*„Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn“* に於て、普通の所謂心理學的法則は抽象的であつて、具體的なる實際の精神生活に於ては表象は一つの *Leiden* であり *Vorgang* であり、それは生じ發展し消滅するのである、斯く形像を内心化し内心を形像化するものが神話、哲學、特に詩の根源である、此活力は不可解ではあるが、それ自身の法則を有し、此世界が滅し、人類が再生するも *Faust*, *Richard*, *Hamlet*, *Don Quixote* の如き型はいつも繰返されるであらうと云つて居るが、多種多様な藝術はすべて我々の豊富なる感情の内容を現はす言語に外ならない。純なる感情は靜なる快不快といふ如きものでなくして、人心の奥深く潜める動く或物である。快不快といふのは反省せられた結果に過ぎない。我々は判斷作用と名づけられたる意識の中に含まれた意味内容に就て眞とか僞とかいふ如く、作用の結合たる人格的統一の内容に就て快とか不快とかいふ價值判斷を下すのであるが、眞僞の内容の豊富なる如く快不快の内容も豊富である。快とか不快とかいふのは抽象的な

る種族名に過ぎない。或は快不快の感情其物に種々の内容があるのではなく、感情の内容とは之に伴ふ知的對象に過ぎぬと云ふかも知れぬが、判断の内容が單に表象の結合に依つて盡されない如く感情の内容も單に知的對象の結合に依つて盡されない、結合の上に現はれたる創造的或物がその内容となるのである。感情の場合に於ては之を廣義に於ける想像作用と云つてよからう、想像作用は廣き意味に於て作用の結合と考へてよい、アプリオリのアプリオリと云つてよい。例へば「甲は甲である」といふ判断を翻つて見るリッケルトの所謂 *homogenes Medium* はカントの *Einbildungskraft* である、*Thesis* たる一つの作用と *Antithesis* たる一つの作用とを結合する具體的立場である。此の如き所謂形式的作用の結合の内容は論理的感情の内容を成すのである。之と甚しく異なる様に見える感官的感情であつても、その背後に人格の核ともいふべき創造的或物があると考へることができ、感情はその表出である。何等の概念をも交へない純なる感官的感情は此の如き創造的なる或物の言語である。此場合に於てはすべてが美である、肉體的快樂の卑むべきは之を概念化するに依る。此等の感情を自我の抽象的立場から見れば、單なる苦樂としてすべてその純なる内容を失ふのである。藝術家の眼には線は直線と曲線との *Durchdringung* であ

り色は種々なる Tendenz の結合であるといふ様に、創造的立場に於ては種々の感覺も作用の結合である。藝術的感情は此の如き作用の結合即ち想像作用の内容である。無論普通には此の如き作用を想像とは云はないであらうが、所謂想像作用といふのは此の如き創造作用の一部分と云つてよい。判断の内容に種々の眞理である如く想像の内容は種々の美感があり、想像は判断に比して一層根本的である具體的立場であると云ふことができる。外的形像を離れ即ち知的對象を離れて純なる創造的或物を言ひ表はすものは恐らく音樂であらう。音樂は純なる感情の語である。シヨペンハウエルのいふ如く物自體を現はすものである。純なる感情は知識に對して超越的である、カントが形式美に就て云つた如き感情の先驗性は内容美の上に於ても認めねばならぬ。

感情の内容といふのは右に述べた如く我々の精神の根柢たる創造的或物即ち動く或物の上に成立する根本的意識の内容である。恰も判断の内容がその要素たる表象の中に求むべからざるが如く感情の内容は知的要素の中に求めることはできぬ、唯藝術に依つてのみ之を現はすことができる。我々の意識内容がすべて動的となり、すべてが一作用に結合する時、即ちすべてが自己となる時、此の如き内容が現は

れるのである。意識の本質が内面的作用即ち主體なき働きであるとすればかくの如き意識は實に意識の意識とも云ふべきであらう。此意識を分析すればその要素はすべて知的對象に還元せられるかも知れない。併しシムメトリは單に線の結合以上に或物であるが如く、此意識は唯動く或物に依つてのみ理解せられるのである。スピノーザが情緒の定義の中に論じた情緒の分析の如き實驗心理學者は如何に考へるか知らぬが、今日に於ても情緒の深い内面的説明と云ひ得るでもあらう。併し

*Love is pleasure accompanied by the idea of an external cause* と云ひ、*Joy is pleasure accompanied by the idea of a past thing, which surpassed our hope in its event* と云ふも愛は單に pleasure + idea of an external cause ではなく、喜は單に pleasure + idea of a past thing ではなく。愛も喜も共に自我の根柢より動く一つの力である、一つの働きである。愛は外界原因の表象に伴ふ快感であると云ふ代りに、外界原因の表象は其物に對する愛によつて成立すると云つてよい。我々が眞に物を知るには之と *mittheilen* せなければならぬ、すべての知識の根柢にはリッブスの云ふ如き感情移入がある。我々が眞に人を知るには之と同感せねばならぬのみならず、色を知るには色と同感せねばならぬ、音を知るには音と同感せねばならぬ、色を種々なる Dimensionen への連続として見る藝術家は

色と共感するのである、之と共に動くのである。綱渡りを見て居る人は之と共に動く云ふ如く、我々が物を知るには先づ作用と結合せねばならぬ、而して作用との結合は感情である。我々が過去の事柄を知るには現在の我は過去の我と結合せねばならぬ、即ち過去の作用と結合せねばならぬ。外界原因を知るには現在の我は思惟我と結合せねばならぬ、思惟作用と結合せなければならぬ、即ち先づ我を擴大なければならぬ、大なる深い我が動かねばならぬ。死後再生して王となるも生前の記憶がなければ何等の幸福を感じない様に又ダンテが不幸の時に樂しかりし日を思ふより悲しきはなしと云つた如く、過去現在を通じて之を對象とする自我の上に喜あり悲あり、物我を通じて之を對象とする自我の上に愛あり憎あり、此等の情緒は純なる作用と作用との結合の上に成立つ純我の波動である。純なる音楽は蓋し此波動を表はすものである。アウグスチヌスが *der im Drang der Liebe seine Selbsterkenntnis wollende Geist bereits das Wissen seiner selbst habe* と云ふ語に深い意味があると思ふ。此の如き知識は無論概念的知識ではない、眞實在の形は無形の形でありその聲は無聲の聲である、之を知るにはプロテヌスの所謂 *schweigendes Verstehen* に依らねばならぬ。以上論じた如く我々の情緒は感覺や表象の羣に快不快の單一感情が結び付いたも

のではない、具體的感情は知識よりも深い意識である、認識對象よりも尙一層深い實在の表現である。一般の心理學者は種々なる知的要素を除去すれば感情は快不快の兩性質に過ぎないと云ふが、此の如きは人間を男女に分つ如き類型の見方に過ぎなす。Titchener はサントに反して *excitement and depression, tension and relaxation* は單一なる精神現象ではなくして有機感覺を含んで居ると云つて居るが、此等の感情は單に下等なる感覺に伴ふと考へられる快不快の感情に比して高次的なる知的要素を有するかも知らぬが、孰も獨立の具體的感情として所謂快不快と同様に單一であるといふことができる。余は是に於て所謂下等なる感覺に伴ふ快不快の感情と感情の一般的性質としての快不快即ち抽象的概念の快不快とを區別せなければならぬと思ふ。一種の具體的感情としての快不快に對してはすべて他の感情も單一であるが、抽象的概念としては判斷は眞か僞かの孰かなる如くすべての感情は快か不快かの孰かでなければならぬ。感情の本質を自我の一點に於ける作用の結合にあるとすれば、その根本的性質は結合するものとせざるものにと分れ、快と不快とが感情の根本的性質を表はすと考へられるのは至當のことである。心理學者は右の如き快不快の二義を明に區別して居らぬ所から、多くの混雜を來たすのではなからうか。

複雑なる感情の要素として考へられる快不快は有機感覺到伴ふ快不快と同一の内容と考へ得るであらうか。我々が怒る時にも喜ぶ時にも、否繪畫に對し音樂を聞く時すら、一種の複雑なる有機感覺を伴ひ之と共に快不快を感ずるであらう。併し我は此場合に於て二つのものに注意することを忘れてはならぬ。私が名畫にみとれて居る時、それと同時に有機的なる快不快を感じて居るのではない。我々が名畫の感情から注意を所謂快不快に移した時、既に名畫の感情は失せ去つて居るのである。ニーチ<sup>ニ</sup>が「Leib bin ich ganz und gar」と云つて居る様に、我々が全我を打して一理想に没入する時、自ら肉體を動かさねばならぬ、肉體的變化をも伴ひ來らねばならぬ。所謂單一感情と同じき脈搏や呼吸の變化を起すであらう。純粹に客觀的立場に立つて見れば、有機的なる快不快を混ずるとも考へられるであらう。併し純なる感情はモザイクではない、具體的感情はいつでも一でなければならぬ。自然科学的見方よりすれば、要素は孰の場合に於て不變であるかも知れぬが、判斷の中に含まれた表象が單なる表象自身と異なる如く、美的感情の成分としての快不快は單なる快不快と異なるものと見ることができる。意味即ち實在なる精神現象に於ては意味内容の相違は實在の相違と見なければならぬ。斯く考へるものゝ余は必ずしも



ヴントの單一感情の分類を辯護するのではない。ヴントの心理學には屢根本的に立場の混淆がある。ヴントは實驗心理學者として *method of expression* によつて自己の説を固め様として居るが此の如き實驗に對し Titchener が “A Text-Book of Psychology” §72. に於て論じて居る如く *method of expression* 及び *method of impression* の二方から反對することができるとするならば此點に於てヴントの説を不正確と考へねばなるまい。ヴントは實驗心理學の立場へ内省的心理學の立場を混じたといふ譏を免れ得ないであらう。純なる自然科学的心理學としてテイチナーの如き考が徹底的であるかも知れない。

上來述べ來つた如き譯であるから感情には無數の單一なるものがあり我々が感覺の性質に就て分類する如く感情の性質に就ても分類することができるであらう。此の如き分類の種族名として快不快といふ如きものが考へられるのである。ヴントの三方向の區別の如きも又一種の考であらう。併し兎に角此等は限定せられた或特種の色覺とか音覺とかいふものと同一の意味に於て單一なる要素といふことはできぬ。次に感情の強度といはれるものに就ては感覺の強度といはれるものと同じく、更に大なる統一への關係である。而して我々の自我の最高統一は意志であ

るとすれば、感情の強度とは意志への關係を意味することとなる。感情は動機として強度を有つと考へることができるのである。

## 四

最も直接にして具體的なる物自體はすべての範疇を超越し我々の言語思慮を入るべき餘地はない、尙はんと欲せば乃ち背く底のものである。我々が何等かの立場に立つて見た時、そこに我々の意識界が現じ來る。如何にして絶對の世界から相對の世界を生じ來るか、我々が何等かの立場に立つて見るといふことは何を意味するか、我々は之に對して何等の説明を與へることはできぬ。意識の前に意識はない、知識の前に知識はない、是に至つて知識の權は窮するのである。さらば絶對は不可知的なるか、無意識的なるか、若し斯く限定し得るならば既に相對的に過ぎない、眞實在は知不知に屬せざるものである、絶對は單なる假定ではない、受用不盡の力でなければならぬ。意識の中に於ても、知識といふのは或一つの立場から經驗内容を純化して行くのである、此意味に於て内容を純化することができればできる程、知識は客觀的となる。誤謬は立場の混淆より來る、我々は之を主觀的といふ。知識の立場に於て

は主觀的なるものは反規範的であり誤謬である。主觀的狀態と考へられる感情は之に反し此の如き立場其物を對象としてその意味内容を明にする意識である。知識は知識自身の立場を顧みることとはできぬ。哲學といへども思惟の立場を離れない、哲學は全體の關係を示す投射圖ではあるが、未だ平面を離れない、哲學は尙作用の内容であつて作用其物ではない。併し我々の意識は作用を超越した領域を有つ、全體の世界を有つ、物體現象に於ては作用と作用の意識とは別物と考へられるが、意識に於ては此兩者は一でなければならぬ、作用其物の意識がなければならぬ。(かゝる立場から見ても哲學も一作用の内容に過ぎない、その基には人格的或物があるのである、余を此意味に於てデイルタイの "Weltanschauungslehre" に興味するのである)。此の如き作用の結合の意識が純主觀的なる感情である。立場の混淆は知識に對して誤謬であるかも知らぬが、感情に於ては眞である。誤謬は深い人間性を現はす、*Plus un être est laid dans la nature, plus il est beau dans l'art* と云ふのも此點にあるのである。すべて一つの立場に於て矛盾に陥るものも高次の立場に於ては、可能的内容となることができる。表象の立場に於て不可能なるものも思惟の立場に於ては之を可能的内容となすことができる。知識の立場に於て矛盾と考へられることも、感

情の立場に於ては積極的内容となすことができる。要するに感情とは作用の作用たる意志の内容である。併し意志と知識との間に想像 *Phantasie* といふ作用を考へるならば、感情は想像の内容といふこともできるであらう。我々は作用の作用たる意志を超越する立場を有たぬ。意識は意志に至つて窮極するのである、意志に於て物自體と接觸するのである。唯意志の窮する所一轉して我々は知不知に屬せざる眞實在の境に入ると考へることが出来る。Salomon Maimon は極限概念によつてカントの物自體を考へ、之をライプニッツの *petites perceptions* と結合したと云ふが、極限點に達するには飛躍がなければならぬ。物自體としての *petites perceptions* の世界は知識の極小限ではなくして明なる情意の世界でなければならぬ。

感情の概念を右の如く考へるとに依つて感情と知識との異なる種々の特徴を説明することができると思ふ。知識は之に注意を向ければ向ける程明なるに反し、感情は之に注意を向ければ却つて消滅すると云はれるが、感情とは自我の主觀的狀態である、作用の意識である、アプリアオリ其物の意識である。之を注意の對象とすれば感情其物の失せ去るのは當然である。感情は對象其物に深く注意することに依つて却つて之を深くすることが出来る、對象に純なることに依つて又感情に純なるこ

とができる。ブレンターノの云ふ如く意識現象を對象的關係 *gegenständliche Bezie-*  
*hung* に依つて區別するとすれば感情は無限數の如く反限定的限定であつて消極的  
 對象關係とも考へ得るであらう。それでは如何にして感情が意識せられ得るか、感  
 情が意識せられた時既に知識であつて感情でないではないかと云ふこともできるで  
 あらう。此等の疑問に對して余は感情は作用の作用たる意志の立場に於て之を對  
 象化しその内容を限定することができると思ふ。有限數の立場に於ては全く消極  
 的と見るの外なき無限數も高次的なる立場即ち集合論の如き立場からは積極的  
 考へ得る如くに知識の立場に於て無限定と考へられるとも意志の立場に於て積極  
 的内容を限定することができるのである。純粹意志の立場に進めば進み得る程感  
 情の内容は明瞭となる、美感は此の如き純粹活動の感情である。プラトノのイデア  
 の世界はプロテヌスの考の如く美の世界でなければならぬ。之に反し之を反省し  
 之を概念化すればすべてが不明瞭なる類型的快不快の感情となる。感情が意識せ  
 られた時既に感情ではない、感情はいつも現在のであると云ふが若し此考を嚴密に  
 すれば他の意識現象に於ても同一の現象を繰返すことはできないと云ひ得るであ  
 らう。特に感情のみ斯く考へられるのは知識内容は客觀的と考へられるに反し感

情の内容は主觀的と考へられ、而して主觀は時間的に絶えず推移すると考へられる爲であらう。之に反し意識は一般者の自己實現として考へれば、すべて意識の根柢には永遠なるアプリオリがあり、感情はアプリオリのアプリオリとして永久に現在と考へることが出来る。純粹感情の内容は知識のその如く客觀的である、唯感情は知識對象に注意することに依つて意識することが出来るのである、知識内容を動的に見ることに依つて意識することが出来るのである。感情と表出運動との關係に就いて見ても、種々なる作用の統一であり種々なるアプリオリの結合點とも云ふべき自我の内容たる感情は表出運動を伴はねばならぬ。純粹なる感情は動的でなければならぬ、自ら身體の運動も伴ひ來らねばならぬ。此點から見て表出運動は一種の象徴であり、藝術的象徴は一種の表出運動と考へることが出来る。

以上述べた如き譯であるから、感情には知覺と同一の意義に於て一般的妥當性といふものはない。趣味判斷 *Geschmacksurteil* には知的判斷と同一の意義に於て一般的法則を立つることは不可能であらう。何となれば知識は限定せられたる或アプリオリの上に立つが、感情はアプリオリのアプリオリたる自由なる人格的統一の内容である、知識的に無限定なるものゝ統一である、内に還つて何處までも統一を求め

るのである。統一を創造し行くのである。知識は或一つの立場からすべての経験内容を統一して行くのであるが、感情は自己の内に還つてアプリオリ其物を統一するのである。統一を自己の中に求めるのである。而して人格の人格たる所以はその無限に自由なるに存するのであつて、感情の統一は此の如き自由の統一である。此故に我々は感情に對しては知識に於ての如く概念的に一般的法則を立つることはできない、何等かの意味に於て一般的なものゝを假定するならばそれは既に知識の立場に墮するのである。 *Sensus communis* の如きも此種の非難を免れない。感情のアプリオリは概念以前の自由なる純粹活動のアプリオリである、そこには一々が創造的であり、一々が個性的でなければならぬ、一樣といふ意味に於て一般性を容るべき餘地はない。單に超越的人格の有機的統一として一般性を認め得るのである。すべて感情は純なれば純なる程美である、感情が純なるとは概念の混淆を離れることである。感情が概念を離れて超經驗的となればなる程美的となる。リップスの感情移入も此の如き意味に於て先驗的に作用と作用との結合でなければならぬ。我々は綱渡りと同一に感ずるも自分は綱渡りとは思はない、斯く我々が超知識的境域に於て綱渡りの作用と結合する所に、美感の基たる感情移入があるのである。我々の

概念的理理解といふのもその根柢に一種の感情移入がなければならぬ。知的内容も知識の立場を超越して純なる一つの作用として見られた時、藝術的意義を有するのである。其他醜惡と考へられる種々の題怒哀樂の情緒も、純なる人格の立場から見て、すべてが藝術的となることができるのである。

カントは美感とは特殊から一般に行く反省的判断作用即ち自然の形式的合目的性に伴ふ感情であると云つて居るが、反省的判断作用といふのは知識的なる限定的判断作用を逆にしたものである。アプリオリのアプリオリたる意志の立場からアプリオリ其物、作用其物を對象として見たものである。カントは感覺的なるものは *Genium* であつて *Interessa* を伴ふと云ふが、感覺的經驗もそれ自身に連續的なる内面的發展である、それ自身のアプリオリを有つて居る。純なる人格の立場に於て反省せられたすべての作用は美感を伴ふと云はねばならぬ。感覺的經驗も純なる人格の立場に於てはすべて美である、唯少しでも概念を混ざれば、忽ち醜惡なる喜怒哀樂の情緒であるとなるのである。